戦国風流武士

昭和三十八年十一月二十日　印刷
昭和三十八年十一月三十日　発行

定価　二八〇円

著者　海音寺潮五郎
発行者　豊島清史
印刷者　菅生定祥

発行所　株式会社　光風社
東京都千代田区神田錦町三ノ一四
電話東京(291)〇二三八番
振替東京五六五二六番

落丁・乱丁は御取替いたします。

戦国風流武士

海音寺潮五郎

KOFUSHA

目次

山王の神　七
駿馬松風　二五
恋談義　四三
六条柳ノ馬場　六一
名古屋山三　八二
朱金のよそおい　一〇〇
石川五右衛門　一二〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

内外蹉跌　一三七
からくりの世　一五一
激　湍　一六七
土大根　一八五
ひよつと斎出陣　二〇三
河原歌舞伎　二二一
白雲悠々　二三五

装幀　伊藤誠二

戦国風流武士

山王の神

一

豊臣秀吉は大がかりな城攻めをする人であった。織田信長の一部将であった頃の鳥取城攻めも、高松城攻めも、共にその大がかりな点において日本戦史上の偉観であるが、関白になってからの小田原城攻めにいたっては、その規模の雄大豪壮なこと、言語に絶する。

彼はこの戦争において三十万におよぶ大軍勢を動員し、直接城攻めに使った軍勢だけでも十五万近くに達する。彼は城の守りが固く、短時日では落せないと見ると、おそろしく壮大な長囲の計を立てた。用心を堅固にして城中からの出撃を封ずる一方、海陸からの運輸の便をよくして兵糧その他の物資の輸送を豊富にし、攻囲線の背後に碁盤の目を割ったように井然たる市街をひらいて兵士等の宿舎にあて、諸大名には書院から数寄屋（茶室）、庭園までそなえた屋敷をかまえさせ、自らも淀君を呼び下し、大名等にも各々国許から妻妾を呼び下させ、屋敷の周囲には新鮮な野菜類を得る

ための菜園をおかせた。

また、商人共を集めて商店をひらかせた。この商店では武器や武具はもちろん、酒も、肴も、織物も、外国輸入の品物まで売らせた。さらにまた兵士等の無聊をなぐさめるために遊女屋をおき、海べの風景のよい所には茶店やはたご屋までひらかせたのだ。

これらのいとなみは、長い滞陣に兵士等が飽いてその士気がおとろえるのを防ぐためであったことはもちろんだが、同時に敵の胆をうばって戦意を失わせるためでもあった。

攻囲のはじまったのは、天正十八年の四月はじめであったが、その六月下旬のある日のこと。別動隊として武蔵北部で戦闘していた前田利家は、一応その方面の討伐がすんだので、軍状報告のため、従騎十数人とともに、小田原に向かったが、小田原近くになるにつれて周囲に展開する情景におどろきあきれ、舌をまいた。

「さても、さても、人間わざではないわ。大そうもないことをなさる殿下じゃ」

と、いく度も言った。

利家と秀吉とは若い時からの仲好しだ。共に織田家の家臣として、何十年も親しくつき合って来て、その人物のほどは互いによく知り合っているはずなのに、その利家がこと新しいことのように、こんなにまで感嘆するのだ。従騎等が輪をかけて感嘆したのも道理だ。冑の眉庇の下の目はたえず見はられ、ひっきりなしに驚嘆の声をもらし、秀吉にたいする畏敬の念が一刻ごとに高まって行くのであった。

ところが、唯一人、最後尾に馬を打たせている男だけは様子がちがっていた。どんな情景が展開

しても、もの静かな微笑をちらりと浮かべるだけであった。しかも、その微笑には皮肉げな影さえあった。

やがて、一行は、秀吉の本営のある笠懸山（いま石垣山という）の麓を流れている早川の岸についた。

岸べに番所があって、引きとめられ、利家とほんの二、三人だけが通されて、他の従騎等は待たされることになった。

待っている退屈さに、従騎等は番所を出て、早川の川原に出た。ごろた石のごろごろとある川原だ。そのごろた石に腰をおろして、笠懸山を仰いだ。

眉にせまってそびえている笠懸山の上には、宏壮な城が出来ていた。そそり立つ石垣、白堊の壁、微妙なそりをもった多数の屋根、真夏の翠嵐の中に、なんともいえずあざやかな建築美を構成している。

彼等はこの城に関する話を聞いて来ているが、それはこうだ。

秀吉はここに到着するとすぐ、この山が小田原城を眼下に見下ろせる上に、包囲陣全体を見渡せる位置にあるのを見て、ここに城を築くことにしたが、その築城法はいかにも秀吉らしい機略に富んだものであった。

その頃まで、この山の頂きは巨大な杉の林で蔽われていた。彼は小田原城に向かった側の杉だけのこしてあとを伐りはらい、昼夜兼行で工事をすすめた。

「見かけだけの城でよろしい。ここに敵を引き受けて戦うことはないのじゃ。丈夫にすることはい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

らんぞ。速いを功とするぞ」
と、奉行等に言いわたした。
奉行等も、そのつもりで工事をいそいだ。石垣だけはまあ完全に積んだが、あとは現代で言えば映画のセット式にこしらえ立てた。柱は削らず、板壁は荒板のままたたきつけ、白壁にすべき所は近郷近在の民家から徴発して来た雨戸や板壁をならべて杉原紙を張ってすませた。数日で完成した。近くから見れば目もあてられない粗末なものだが、遠くから望めば巍然たる大城砦だ。
「よし、見事に出来たぞ！」
秀吉は大満悦で、その夜、前面の杉を伐りはらわせた。
舞台の幕があいたようなものだ。夜が明けて、小田原城内では仰天した。夢かとばかりにおどろきあきれ、
「ひとえに天狗の業ぞや」
と、おじおそれたというのである。
「あの白壁、あれがそれじゃな」
「ほんにのう、ここから見ると、とうてい紙ばりとは見えぬのう」
「お智恵のほど宏大なものじゃ」
利家の従騎等は、今さらのようにまた感嘆した。
先刻のあの青年だけが、知らんふりで、少し離れた位置にある岩に陣取って、鎧の引合わせからとり出した書物を読みふけって余念もない風であったが、人々が感嘆しあきた頃、書物をしまって

やって来た。
「おりゃちょいと用事を思い出した。わきに行って来る」
と言った。
「どこへ行かっしゃります。勝手なことをしてもろうてはこまりますぞな。やがて殿がおかえりになったら、お叱りを受けますぞな」
と一人が目をむいた。
「すぐかえる。なにちょっとだ。そうひまはとらん」
「また、わがままを出さっしゃる」
「ちょっとだ、ちょっとだ」
青年はかまわず、馬をつないである所に行き、口綱を解くと、ヒラリとまたがって、速歩でカッパカッパと立ち去った。
「こまるのう」
武士達は見送って、溜息をついた。

二

この青年は、利家の兄利久(としひさ)の子で、慶次郎利太(とします)といった。絶倫(ぜつりん)の武勇があって、この若さでいく度か武功を重ねているばかりでなく、文学のたしなみが深く、書道、茶の湯、香道等の技芸にも通じ、普通なら文武兼備の模範的武士といわるべきであったが、途方もない気ままもので、世を屁と

も思わないようなことばかりするので、前田家ではもてあましているのであった。
彼は叔父の利家をはじめ従騎等が秀吉のやることに感心ばかりしているのが気に食わないのであった。彼だって秀吉のえらさは十分に知っており、一方ならず感心もしているが、ああ何から何まで感心されると、鼻の頭がムズムズして、ついフンと言いたくなる。もし、彼に遠慮のない所を言わせるなら、この大がかりな攻囲陣は大いに結構だとしても、笠懸山の一夜城は感心出来ないといいたいのである。
「これで一応は敵のド胆をぬくことが出来ようが、このカラクリを知った天下の人々はどんな気がするであろうか。現在のところはまあよい。みんな関白殿下にまいり切っている時だから、えらい智略じゃと舌を巻くだけであろうが、やがていくらか正気にかえったら、感心ばかりはしていなかろう。〃関白様のなさることは、いつもこんなコケおどかしの詐術(さじゅつ)ではなかろうか〃と思うようにならないともかぎらない。そうなったら、ゆゆしい将来の禍いのもとではないか」
と、思うのであった。
慶次郎のこの心理は、催眠術にかかっている者を見ている醒めたる人の心理であり、酒に酔っている人を見ているしらふの人の心理であり、束縛されている精神を見ている自由なる魂の心理であった。
「おもしろうないわい。関白殿下じゃとて、神様ではない。なさることが何から何まで結構ということがあるものか。窮屈な見方しか出来ぬ阿呆共め！」
と、思うのだ。

こんな時には一ぱいやらずにおられない。それで、ここへ来る途中見ておいた茶店に行って、一献やって来ようという気になったのであった。

茶店は、海べの松林の中にあった。同じような構えの葭簀(よしず)ばりで、軒をならべている。どの店にも半具足、または鎧下着に陣羽織だけ引っかけた兵士等が入って、酒をのんだり、茶をすすりながら餅を食べたりしている。遊女にちがいないヤケにお白粉を塗りこくった派手な着物の女を連れて来て、キャアキャア言わせながら飲んでいる者もいる。

一番混んでいない店を見立てて、馬を下りた。

「ゆるせ」

「へーい！」

こんなところには身分の高い連中は来ないのであろう。身にまとっている鎧といい、陣羽織といい、見るからに高貴な様子の慶次郎におどろいて、店のおやじが飛んで出て来た。

「馬を頼む」

と、手綱を渡して、店に入って、床几(しょうぎ)に腰を下ろした。冑をぬいでわきにおき、

「酒」

と、命じた。

「へーい」

婢共(おんな)があわてて酒をもって来た。

たてつづけに七、八杯のむと、ホロリといい気持になった。あとはゆっくりと飲む。前面は海だ。

夕陽が斜めにさして、微風がわたっている。沖に何十艘となく舟がいる。みんな帆を上げているが、薄桃色に光っているその帆は微動だにしないようであった。これらの船は味方の輸送船や、商人等の船で、あるものはここへ来るところであり、あるものは出て行くところであった。

「盛んなものだな」

右に視線を動かすと、伊豆半島の山々が見えた。京や加賀あたりの景色を見なれた目には、いかにも坂東らしい荒い景色ではあるが、なかなかの眺めだ。

酒は益々うまくなる。まことにいい気持で、景色を眺めては飲み、飲んでは眺めしていると、不意に小鼓の音がして、店に入って来た者がある。猿まわしであった。

めでためでたの若松様よ
枝もしげれば、葉もしげる

小鼓を鳴らしながら猿まわしが唄うと、その肩からピョコンと小猿が飛び下りた。小さい手に金の御幣をささげもって、ヒョコヒョコと歩いておどり出した。

「いけないよ！　出ないよ！」

茶店のおやじが飛び出して来て、どなりつけた。慶次郎に気をかねたのであった。

慶次郎は笑って、おやじを制した。

「かまわん、舞わせろ」

おやじは恐縮して退った。
猿まわしも小猿も元気づいて、演じつづけた。
「もっとやれ、もっとやれ」
慶次郎はいくつも違った曲をやらせて、銭をあたえた後、
「掛けろ」
と猿まわしを前の床几に掛けさせ、酒をもって来させてあてがい、猿には瓜と餅をあてがった。
猿はなかなか手を出さなかったが、猿まわしが、
「三吉や、いただくがいいだ。おらもいただくでな」
と言って飲みはじめると、はじめて手を出して、モグモグと食べはじめた。憂鬱げで仔細らしい目をしばたきながらおとなしく食べる猿の様子が、慶次郎には面白かった。
「よくしこんだものだの」
「へい。手前はもう三十年の上からこの商売をして、この子で六匹もしこみましたが、とりわけこの子は利口でござりますだ。四、五へんも教えますと、スッカリおぼえこんでしまいますだ。へい、なみの人間の子よりずっとかしこいくらいでございますだ。はじめてこげいな利口なやつに行きあたりました。へい」
二合ほどの酒にほろりと酔って、猿まわしは多弁になっていた。
「その方共のような芸人が当地には多数来ているのか」
「へいへい。色々な芸人がまいっておりますだ。いいかせぎになりますで。みんな関白さまのお蔭

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo